

週刊 タバコの正体

タバコを吸い続けると、その有害成分のせいで大なり小なり健康を害し、何らかの病気になる確率が高くなります。病気になると仕事を休まなければならなくなるので、喫煙者はそのリスクが高くなると思われれます。実際、ある調査では下図のとおり喫煙者の長期病欠リスクは非喫煙者の2倍になると報告されています。

長期休養が必要となれば、代わりの人を見つけなければならなくなります。もし見つからなければ、職場全体の労働力の低下をまねき、代わりの人を採用できたとしても人件費が余計に必要となります。どちらにしても企業としては、多少の損失が発生するわけで、喫煙者はそんなリスクが高いのです。

また、喫煙者は毎日タバコを吸う時間が必要となってきます。例えば下図のように一日5回タバコを吸って合計35分間職場を離れるとすると、その間の作業は中断されるので、その分の労働力が低下していると言えるのです。

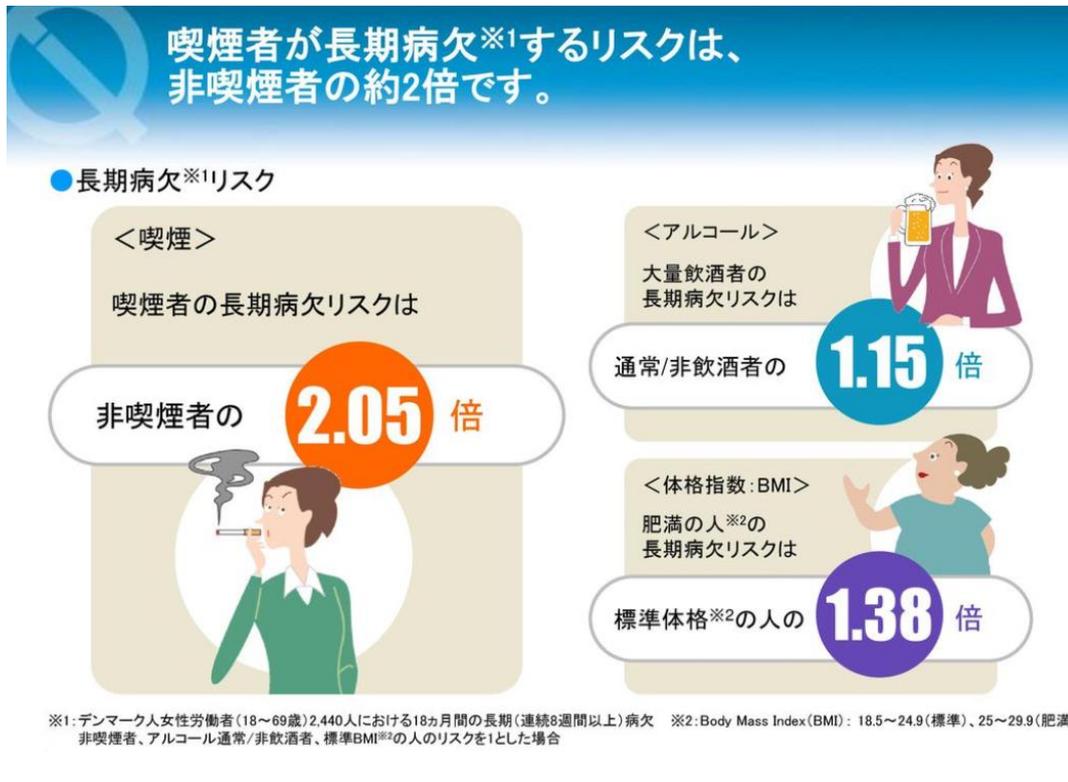
どちらの例も重大な損失には思えませんが、企業の収益に影響がないと言えるでしょうか。

企業の活動は何十年も継続するので、わずかなロスも連続すると意外に大きな損失になる可能性があります。

喫煙者がいない職場という職場では、この差が出てくると思いませんか。

そんな差がでないよう社会全体の喫煙者が減ればいいと思いませんか。

産業デザイン科
奥田 恭久



●勤務中の喫煙による離席

